

はじめに

このたび、『岡山県版レッドデータブック2020』が刊行されることになりました。レッドデータブック（Red Data Book；RDB）とは、絶滅などの恐れのある野生生物種をリストアップし、その生息状況等を解説した資料です。国際自然保護連合（IUCN）が1966年に、絶滅の恐れのある野生動物のリストを刊行したのを嚆矢とし、世界各国で国内版レッドデータブックが作られるようになりました。我が国では、1991年に環境省がまず日本版動物レッドデータブックを作成し、その後、植物種の情報が加えられる一方で、都道府県版のRDBも続々と刊行されてきました。岡山県では2003年に初版が発刊されています。

このようなレッドデータブックを作成する意義は何でしょうか。今日、「環境」は人類共通の重要な関心事となっています。しかし、その関心事は、どちらかといえば、地球温暖化に代表されるように、温度や二酸化炭素、エネルギーといった物理・化学的な環境要因に偏りすぎているように見受けられます。地球の環境を考える際、物理・化学的な要因と共に、決して忘れてならないのは生物的な要因なのです。

40億年前、地球上で、いくつかの偶然が重なり、他の惑星にはみられない特異な現象が起こります。生物の発生です。その後、何度かの全地球規模の環境大変動を経ながらも、生物たちは着実に進化を重ね、この地球上に多様な「生物種」を創出してきました。その結果、今日この星は3,000万種を超えるといわれる多数の生物種を擁する「生き物の星」となりました。

これらの生物種は、それぞれが固有の特性をもった極めて独立性の高い存在です。しかし、一方で、すべての生物種は、自身（個体）が生存し、種（集団）を継続させるために他の生物種との間に密接な相互関係を確立していると考えられています。この構造は、非常に複雑であり、ダーウィン（C.Darwin）が看破したように、生物界全体があたかも一つの大きな網（Web of Life）を作り上げていると考えられています。個々の生物種はそれぞれが、あたかも一つの編み目として生物界に存続しているのです。むろん、人類といえども一つの編み目に過ぎません。

さらに、地球は40億年の時間をかけて、この生物網とそれを取り囲む大気や水系、温度や光などの物理・化学的環境との間に密接で不可分な相互作用関係を築き上げてきたのです。従って、冒頭述べたような、世界の関心を集める物理・化学的環境の実態の把握、さらにはその妥当な保全方策を図るためには、実は生物的環境の精確な動態に関する情報が不可欠なのです。

生物種の構成は万古不易ではなく、40億年の間、地球が遭遇した様々な物理・化学的環境の変動によって、生物界では幾度となく想像を絶するような生物種間の盛衰が繰り返されました。しかし、今日、世界各地で、人間活動に起因する物理・化学的あるいは生物学的な環境の変動は、これまで地球上にかつて経験したことのない大きな変化をもたらしつつあります。地球の自然界にはホメオスタシス（恒常性維持機能）が備わっており、多少の環境変動であれば、生物界も原状の維持が可能です。しかし、その機能にも当然限界があり、今日の地球環境の状況は、地域レベル、さらには地球規模においても、この限界を超えつつあるよう思えます。

生物が物理・化学的、ならびに生物的環境との不可分な相互関係の中で生存、存続していることを考えると、生物各種の生育状況や消長は、その分布環境におけるあらゆる環境状況を反映していると考えなければなりません。レッドデータブックそのものは、その主旨から絶滅などの恐れのある野生生物種のみがリストアップされていますが、このリストを作成するために、可能な限り幅広く生物種の情報が収集され、専門家による検討がなされています。いいかえれば、この本には、岡山県下の現在の生物種の生育状況等に関する情報が集約されているともいえるのです。

このことから、出来るだけ正確な情報を得るために、生物種の生育状況は再調査・再検討される必要があります。今回の刊行は、初回刊行後17年間の調査を基に再度検討された結果が反映されています。

本書を刊行するにあたって、「岡山県野生動植物調査検討会」のメンバー各位やさまざまな形で調査やとりまとめ等作業をご支援頂いた多くの方々に深甚なる感謝を表す次第です。

岡山県野生動植物調査検討会
会長 千葉 喬 三